

# うしお

第 3 5 号

1958 12 16

## 目 次

巻 頭 言	西 田 裕	1
俸受網漁業調査報告書	漁業部竹下克一	3
奄 美 短 信	大 島 分 場	23
薩 南 海 域 かじき、まぐろ延縄漁況		
10月分	23報	漁 業 部 24
呆流魚「魚は魚を呼ぶ」	水産課上村高	26
東海サバ漁況	漁 業 部	27
分 場 日 記	大 島 分 場	31
各 部 日 記	編 集 部	31
編 集 後 記	編 集 部	34

水産学会九州支部大会から水産業改良普及事業西海ブロック会議が地元で引続き開催され、当番の本場はその受け入れ準備と進行に何かとあわたとしかつた。とにかく無事に済んでホツとしたところへ皇太子妃御内定の発表があつた。

ラジオ、テレビ、新聞雑誌あらゆるジャーナリズムに取上げられ、各方面の感想も依えられたが私の知る限りでは真に好評さくさくである。理由は皇太子殿下御自身の御考が強く影響していること、旧来の習慣から抜け出して選考の範囲を拡げ、一般住民の中から立派な方が決められたことにあるようだ。即ち自主性と科学性の尊重に対する多数国民の共感であろう。

反対意見の人も絶無とは思えないが、争の性質上からも又現在大衆の思想傾向からもそれはとうていマス・コミの対象にならぬだろうし、若し乗せてくれたとしても一般から相手にされそうにない。我々は日常の仕事が原則的に改良・進歩を基盤とするためであろうが、封建的・非科学的な考え方に反ばつて感ずるだけに今回の決定は心から御慶び申し上げることである。

こゝで同時に比較することは少し筋違いかも知れぬが、自動車の警笛廃止、メートル法の施行、文書の左横書などなど、やればできることが実現しつつあるのは真に心づよい。これらのことが容易に、努力なくして実現したものでないことは云うまでもあるまい。皇太子様の御考にしても生物学、歴史学、社会学その他いろいろと身につけられた幾年月にわたる教養の総合である。街の騒音防止にしろ、メートル法にしろ、文書の横書にしろ多数の人々が期間をかけ科学的に研究し、かくあるが良いと云う結論に立つて後も確心をもつて実現に努力し続けた結果であろう。

こう云う人を相手の仕事でも実に多大の努力が必要であ

るのに我々の仕事は多くは住む世界を異にする魚等が相手である。水産試験場の漁況関係の仕事で漁況、漁況の突進を明確にすること、漁況の予報を目標にしようとする気遣いになり群旨象をなでる式で収かゝつたのはつい近頃のことである。

往年のように試験船を一般業者船より大型にし、又は進んだ装備をして新漁場や新漁法の開拓指導をするという旗印は引降ろしてしまわないまでも、小さいものを揚げざるを得まい。だとすれば漸く揚げたばかりの漁況研究、漁況予報と云う旗印は次矛に大きなものに、より高く揚げるように努力すべきではなからうか。ところが関係者の会議や、その折にふれてこの仕事に対する不信、不協力、或は誰かがやつてから又はやるだろうと云つたような無関心な依頼心から出ると思われる発言を聞くことがある。これは日本人の道へいと云われるアキ易さ、ネバリのなさを物語るもののように少々心細い気がする。やるべき仕事だとするなら50年や100年続けてぶつかつて見たらどんなものか。

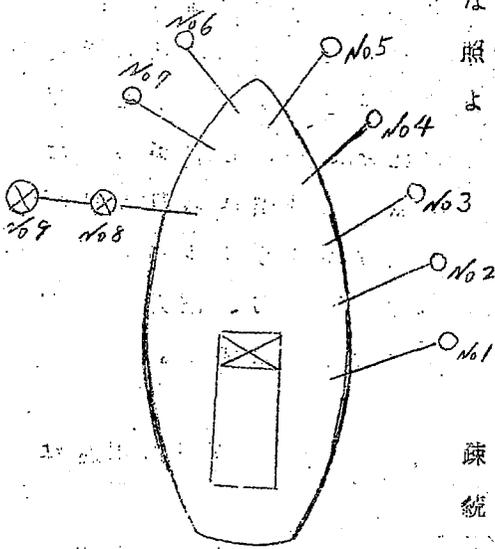
俵受網漁業調査報告

漁業部 竹下 克一

△ 漁 法

1) 漁場、漁群の探査

始め漁場附近に到着し日没をまつて魚群探知機を始動し船を全速で後進させながら No.1、No.2 及び No.8 を点灯しながら船橋上にある B W 探照灯 2 個を各々片舷ずつ正横より船首方向に照射させながら魚群発見に勉む。



一般にサンマ群は表層を泳しており探照灯の照射を受けると照射範囲内の魚群は照射方向に向つて海面上に飛躍する。これが疎であれば集魚せず尚探査を続ける。一般に操業できる群は表層のサンマ群を下層サン

マ群が押し上げるが如く表層サンマ群は海面上 1 m 以上にも飛躍するか、或は探照灯の照射範囲内一面に密に飛躍が見られる。かゝる群を発見したら No.1、No.8 の集魚灯を点灯し船を停止する。

2) 集魚法

No.1 ~ No.8 の全集魚灯を点灯し船を停止する時(魚群が近くであれば停止と同時に後進する)船を風に立てる様に操船する(この時帆を張る)船首を風に立て集魚する時 5 分 ~ 10 分位で船の周囲はサンマ群の飛躍で真白くなる様であればすぐ投網の準備を行う。10 分以上も集魚して魚群が疎であれば次の魚群の発見に勉む。

### 3) 投網法

投網は先ず船首を風下3点に向け即ち投網舷(左舷)船首3点内外より風を向けるようにし集魚灯の右舷側全灯(No.6~No.8)を消し右舷側の集魚灯下に魚群が充分に移動したならば投網を開始する。(左舷側の舵帆を張る事も同時に行う)

投網は始め向竹を投入し次いで前石を残して網地を全部投入し張出し竹で突出して風力と張出し竹とにより向竹が左舷側を5~6区離れ前石が網地の中へ落ちないように網地が舷を離れたら前石を投入し前網を延ばす。

この時両横縁引揚ワイヤーは充分に(前網長と横縁長を加えた長さ)延ばし向竹が船と平行になるように機関で前進或は停止を行つて乗船し充分に張出し竹が張つたら魚群の導入に移る。若し風が無い場合或は風力より潮流が強い場合右舷側より潮流を受けるようにする。この向竹投入より前石投入終り迄の時間は風力、潮力にもよるが風力3前後ならば3分~4分を必要とする。

### 4) 魚群の導入

導入方法は各船頭或はその時の状況により若干の相違はあるが大体次の要領で行う。

- 1 漁具を投入し張出し竹が充分に張る頃No.6~No.8の左舷側集魚灯を点じる。
- 2 No.1~No.2を消す。魚群がNo.3~No.4方向に移動を終えたら
- 3 No.3~No.4を消す。魚群がNo.5方向に移動を終えたら
- 4 No.5を消す。
- 5 No.9を点ず。
- 6 右舷側の魚群が全部左舷側に移動するを見計らつてNo.6~No.7を消す。
- 7 魚群が全部網中に移動したならばNo.8を消す。
- 8 魚群がNo.9の赤灯下を円運動を起すようになつたら揚網開始を行う。

9. 船6～船8の左舷灯を点じてより揚網開始まで1分～30秒～2分間を要す。

又月令が15日等集魚灯の効果が薄い時は右舷側より左舷に魚群は移動し難いのでこの時は船首3KW探照灯で右舷から左舷へあたかもほうきで掃くが如くして移動させるようにする。

#### 5) 揚 網

揚網の合図により揚網機を運転し前網を引上げる。

前網の引上げ速度は普通14K～15K/Mであるが船のローリング等急激なシヨック等の場合は半クラッチ等にして巻上げ風力3前後であれば前網長15を1m～10S前後で引揚げる。

前石が舷側水面上に来れば人力で船上に引揚げ網操りを始めるのであるが前石の水面上に上ると同時に両横縁引揚ワイヤーの巻上を開始し魚群の横方向への逸逃を防止する。又網操りを助けるため向竹引寄せワイヤーの巻取りも開始する。網を操り終り向竹が舷側に来たら引寄せワイヤー縁引揚ワイヤーで巻しめて向竹を釣上げC図の2図の如くデリツキよりフツクで止めておき漁獲物の取揚げにかゝる。一方集魚灯は向竹が舷近くまで寄せられたら次の集魚の為右舷側は全灯を点じ集魚に勉める。

網の投入より前網引揚げ開始までの所要時間は6m～30S前後を要し引揚げ終りまで7m～30S前後を要し漁獲物の取揚げは前記(揚網装置)で述べた如く大タモで取入れを行うが1000メ～2000メの漁獲であれば20m～30m間を必要とし投網より次の投網開始まで2000メぐらいまでは30m～40mで処理を終え、若し漁獲皆無等の場合は12m～13mで次の投網が行える。

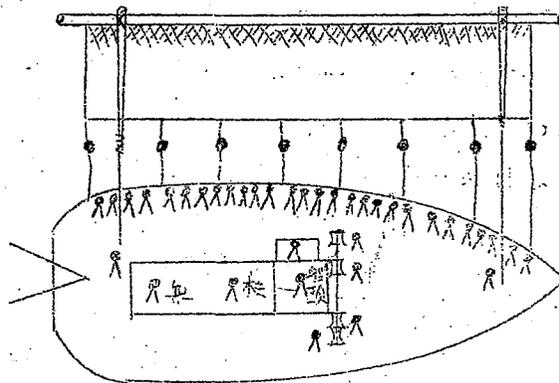
漁獲物の取揚げが終ればすぐ次の投網を開始し向竹を投入し前回と同じ方法で操業を行う。

6) 乗組員の作業配登

100 屯級漁船であり、水面よりの絞の高さが相当高くなり従つて同竹も太く網籠も太い糸を使用しており、又好漁の日は連続一夜中に156回の操業を行うので40名以上の人員を必要とする。各配置を示せば

- イ、巻上ドラム係 4名
- ロ、張出し竹係 2名
- ハ、前石と前石の間の網操人員 4名×7ヶ所 28名
- ニ、船頭1名 機関部1名 無線1名
- ホ、揚網機 1名

の計38名は是非必要で其の他魚倉等の係が好漁の場合には必要となる。



△経営

1) 漁業種類及び漁場漁期

本調査対象船天塩丸は主にかつお竿釣漁業とさんま岸受網漁業により経営されている。即ち初春漁のかつお漁業を、8月迄主に小笠原諸島で操業し時期的にはウラカス方面にまで進出し操業している。かつお漁業は年間8~10航海実施し年間水揚金額の約半分をこの操業で揚げているが31年度の好漁をピークに漁況、漁価、食料費燃料費等の経費の増大にともない近年さんま岸受網漁業による経営の比重が大きくなりつつある。

かつお漁業の終了した9月より12月迄はさんま漁業を10～12航海している。さんま漁業は短期間ではあるが毎年600万～800万の水場を行い、その割にかつお漁業のように必要経費が少なくて経営としては有利である。

別表でもわかるようにその必要経費は水揚高の1割2分前後（昭和32年度）であるに比べ、かつお漁業では昭和31年の好漁の年でも2割3分を必要とし普通の年で6割～7割の大経費を必要としている。

然しさんま漁業も年々不振となるのではないかと懸念されるので合理的が望まれる。

次に12月末かつお初漁期の3月迄は現在までびんなが延縄漁業を北大平洋海区で実施しているがこの漁業は他の魚種（メバチ等）の混獲もあり、魚価の点は池の漁業より有利であるが漁獲率が非常に少ない事及び時期的に季節風が強く操業が困難である等の点から東支那海方面のさば漁業への進出が望まれているおり、或る漁船は32年度は東海で実施し初漁獲にも加へわず一航平均10000メを上廻る漁獲をなしている。

註、別表には天鰯丸の外参照として明生丸の経費内訳書を記載した。

2) さんま漁業による漁具経費  
 (因さんま漁業を新しく操業する場合、現在の船の設備の違い或は設備内容により設備経費は相当な相違はあるが概略次のような設備費は必要であろう。

1. 魚具一式 (一張)	300000～500000
2. 揚網機	150000～250000
3. ドラム設備費	100000 内外
4. 揚網機駆動装電	150000～500000
5. 甲板上各設備	200000～500000
6. 養魚機 30KW 1基 及び 養魚機 1基	1000000 内外

即ち新しくさんま棒受網漁業を開始すれば最低2000000  
円程度は必要である。

次に毎年補充或は取替える施設では

1 漁 具

綿魚具でさんま時期だけ使用するものであれば2~3  
年は使用できるが毎年その一部を新網と取替え使用し  
ており出来得れば2統以上を所有し一網ずつ取替使用  
する。

2 ワイヤー類

さんま棒受網ではワイヤー類の使用は多く、前網等は  
毎年新品と取替え古前網は他の部分に使用するので約  
全使用量の半分は毎年取替えるようになる。

3 そ の 他

他はその使用程度により相違があるが主に補充すべき  
品目では薬魚灯用或は甲板灯用キヤブタイマーの一部  
滑車類、回竹、張出し竹等がある。

天 満 丸 経 営 調 査 書

(単位1000円)

天 満 丸	1 4 3 0 6 5	3 6 0 円
漁 期		
まぐろ、とんぼ延網漁業		1 2 月 ~ 2 月
かつお釣漁業		3 月 ~ 8 月
さんま棒受網漁業		9 月 ~ 1 2 月

利益配分方法

$$\text{水揚高一 大仲経費} = \text{純益} \times \frac{1}{2} = \text{船主} = \text{船員}$$

金	
船 体	1 8 0 0 0 一
機 関	7 0 0 0 一
補 機	9 8 0 一

ギ	装	3 2 0 0 -
漁	具	6 0 0 0 -
無	線	2 1 0 0 -
方	探	6 0 0 -
魚	探	8 8 0 -
ロー	ラン	8 7 0 -
発	電 機	2 9 0 0 -

収 入

年 次 項 目	29年 1月～12月			30年 1月～12月			31年 1月～8月		
	航数	漁獲量	金額	航数	漁獲量	金額	航数	漁獲量	金額
まぐろ漁業	2	3.231	1.912	4	8.700	3.397	3	6.000	2.382
かつお漁業	10	38.317	12.844	8	33.276	9.788	10	55.368	20.601
さんま漁業	11	87.933	8.478	11	120.000	6.670			
計	23	126.481	23.232	23	161.976	18.022	13	61.368	22.983

昭和32年度権受網支出入並貸内訳書

自昭和32年 9月12日  
至昭和32年12月20日

才 入

水揚高 (サンマ 100,000)

8 7 6 7 3 8 4 (12 航海分)

才 出

燃 油 代	1086400	薬 品 費	4860
水 代	417282	修 理 費	41056
餌 料 費	250997	消 耗 品 費	161402
船員保護費	269952	雑 費	17220
賦 課 金	46000	氷 代	3380
通 信 費	10071	入 港 費	272200
上 架 手 当	33400	食 料 費	191942
旅 費	16690	計	2 8 2 2 8 5 2 円

天満丸年度別支出内訳書

単位 1000円

項目	年度	29年度	30年度	31年度 1月-8月
市場手数料		929	720	918
大仲経費		18790	11743	14060
燃料		3370	2814	2125
餌料		2708	2070	2009
餌員費		47	22	64
漁具費		120	95	100
主食費		942	698	334
副食費		175	48	186
水代		723	772	174
通信費		30	20	28
旅費宿費		5	3	5
信仰費		100	80	38
酒果子費		180	120	130
医薬代		80	35	25
無線費		38	25	80
点灯費		—	—	—
消耗品費		100	90	85
保険料		609	667	528
雑費		44	36	65
税金		—	—	—
交際費		60	50	38
祝賀費		10	85	68
田当		6912	4785	7974
(松島町) 費		—	—	—
水代		—	—	—
支払利息		—	—	—

三  
内

項目	年度		
	29年	30年	31年 1月-8月
船主経費	5322	2032	3265
船体修理	3958	356	1197
機関修理	246	257	1000
無線修理	80	15	37
船具修理	500	280	40
主副食費	—	—	—
酒果子代	62	80	30
支払利息	—	—	—
雑費	22	18	30
旅費宿費	2	3	5
祝賀費	30	40	28
諸税公費	189	192	214
信仰費	50	60	30
交際費	36	44	112
公諫費	—	—	—
日当	144	716	844
魚探その他	—	—	—
合計	32042	14497	18244

茅 2 明 生 丸 経 営 調 査 書

茅 2 明 生 丸

8 9 0 1 屯 2 5 0 馬 力

乗 組 員 4 0 名 昭 和 2 9 年 4 月 7 日 進 水

漁 業 種 類

4 月 ~ 8 月 かつお 釣 漁 業

9 月 ~ 1 2 月 さんま 漁 業

1 月 ~ 3 月 底 魚 一 本 釣 或 は ト ン ボ 延 縄 漁 業

資 産

船 体	4 4 0 0 0 0 0
機 関	1 0 0 0 0 0 0
ギ 装	3 0 0 0 0 0 0
漁 具	2 0 0 0 0 0 0
そ の 他	8 6 0 0 0 0

利 益 配 分 法

純 益 の  $\frac{1}{2}$  を 船 員 側 或 は 船 主 側

年 間 漁 獲 収 入

年 次 項 目	2 9 年 4 月 ~ 2 9 年 1 2 月			3 0 年 1 月 ~ 3 0 年 1 2 月		
	航 海 数	漁 獲 量	金 額	航 海 数	漁 獲 量	金 額
かつお 漁 業	1 6	2 8 8 9 0	7 6 7 4	1 6	2 4 3 4 1	5 9 4 3
さんま 漁 業	1 3	6 7 4 8 0	4 8 6 4	1 8	1 0 4 8 6 1	5 4 5 4
計	2 9	9 5 0 4 0	1 2 5 3 9	3 1	1 2 9 2 0 2	1 1 3 9 7

3 1 年 1 月 ~		
航 海 数	漁 獲 量	金 額
1 0	2 6 0 2 1	7 0 9 8

支 出 内 訳 表

(細 目 については単位千円)

項 目	年 次		項 目	年 次	
	29年 4月~12月	30年 4月~12月		29年 4月~12月	30年 4月~12月
市場手数料	421900	399400	船主経費	1748509	2797900
大仲経費	9488418	9384356	船体修理	138	167
燃料	2211	2779	機関"	331	300
餌料	2580	2492	無線"		138
餌員費	47	67	船具"	140	350
漁具費	59	59	支払利息	498	1050000
主食費	542	542	雑費	500	148
副食費	361	361	旅費宿費	19	38
水代	432	432	祝賀費		
通信費	18	18	諸税公費	57	68
旅費宿費	17	18	信仰費	18	20
信仰費	9	18	交際費	50	80
酒菓子費	23	29	公課費		
医薬代	48	28	日当		
無線費	35	35	魚探代		12
点灯費			その他		487
消耗品	88	71			
保険料	256	511	計	11688827	
雑費	90	112			
税公費					
交際費	38	24			
祝賀費					
日当	2629	1613			
(船員配当)					
運弔費					
水代					
支払利息					

あじ、さば 掬受網 漁業 調査

(一) 調査船の性能

船名	妙福丸		
総屯数	2983 \$		
純屯数	1219 ton		
機関	主機	ディーゼル	120 HP 補機なし
無線機	無線機	3W超短波無線電話	1基
乗組員	31名		

(二) 漁ロウ設備

本、あじ、さば掬受網漁業は昼間だけ操業するので集魚灯設備は不要であり、又海面より舷までの高さが低い為同竹を船上に引揚げる設備、網糸が小さく目合が割合太いのでさんま掬受網漁業で使用するような揚貨装置等一切不要で、たゞ主なものは揚網機一台、肉スリ機、櫓の装備（無風状態の時及び操船を容易にするため使用する）だけをすれば良い。

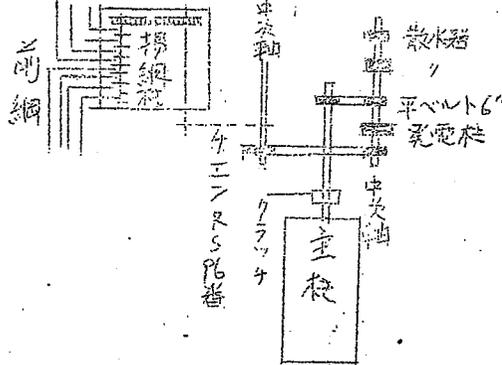
イ、揚網機

前網6本巻を使用

ロ、同上駆動装置

主機より中次軸を経由して駆動しており、構造規格等さんまの場合と同様な方法が使用されている。

本船の場合は下図の通りである。



## ハ、発電機

10KW      25KW      3KW      3台

さばはね釣漁業を実施する場合に10KW、25KWは使用し3KWを一般船内灯として使用する。

## ニ、散水機

口径2"及び3"      2台

散水機は散餌を使用すること、或は一般雑用として2"径一台を使用するが3"径の散水機は近海かつお釣漁業を実施する場合使用する。

## ホ、肉播機

大型肉播機は台を装備しR/M250~280回転速度となるよう中次軸で駆動する。

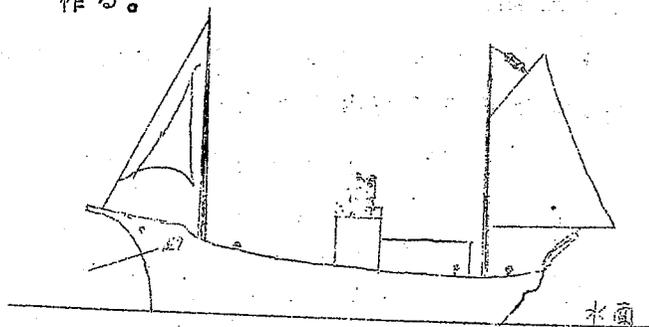
(クラッチを装備する)

## 一、舵帆及びステイスール

船尾橋に舵帆を装備し前橋には小型のステイスールを装備する。このステイスールは風のある場合橋の役目をするものである。

## ト、橋

長さ15尺~16尺の4丁を装備し左舷側に橋受を作る。



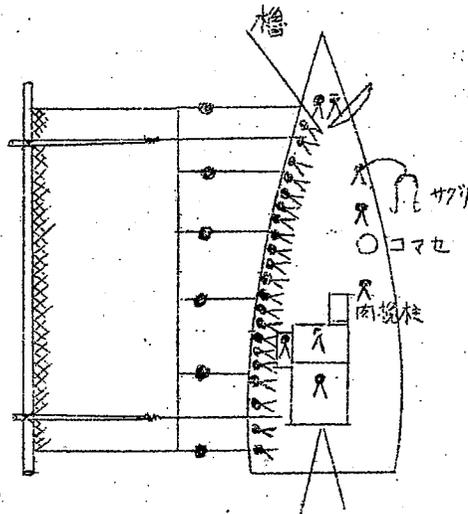
## チ、その他の設備

操業中に於ける操船は風向力、潮向流を常に考慮して船頭の統一指揮の下に敏速に行う事が必要であるので操縦、主機関の駆動を同様に行えるよう船橋上に主機

のクラッチを遠隔操従できるように装備する。

### リ、乗組員

乗組員は最低30名を必要とし下図のような配置で採集する。



### 漁法

1) 魚場附近を魚探で探査し記録が現れたら船を風回りに立てて停止し、散餌(コマセ)を散布しボウジ(下図参照)にコマセ(一貫入位)を入れて水深15K位まで投入し引上げながらコマセを散布し魚群の誘導する又は名程天釣で探ぐりを入れておき船上からたえずコマセを散布しておく。

天釣で魚群が一尾でも釣れたらコマセを多量に散布しボウジを3本位差す。(基本コマセとなる)

A図 ボウジを差し終えたら投網するのであるが基本コマセで餌付けてある魚群が投網のため逸散するので投網は基本コマセより風上に離して投網する基本コマセより離す方法は始め左舷に操船(B図)し、次に風上に立て(C図)次に右舷に操船する。(D図)

右舷に操船する場合機関力により操船するのであるが回転を急に早くするため(機関だけでは前進しすぎる)前檣にステイセイルを張り又船首より檣をもつて船首部を早く右方に回転させる。船体中央部操舵室前部に風力

或は潮流により基本コマセが流れ付くような位置に来たならば投網を開始し 帆前部ステイセールに風を強く受けるように張る Ⅲ図

投網中は向竹と船体が平行になるよう操船する。Ⅳ図  
基本コマセが船体中央部に流れ付いたら左舷より散コマセ或はボウシを投ず（ボウシの数は4本～10本で魚群の多い程数を増し散コマセも多量にする） Ⅴ図

左舷より差したコマセが網中央部に流れたら揚網を開始する。Ⅵ図 揚網開始、前綱が揚り前石を船内に取入れたら右舷側では次回の基本コマセを投入する（Ⅶ図）

揚網を終えた時の船の位置は前回Ⅲ図の投網開始の状態であるのですぐ次回の投網を実施する。Ⅷ図

以後は漁のあるまで10回でも20回でも同一場所を前図同様な方法で操業する。

## 2) 網成り不良の場合その他

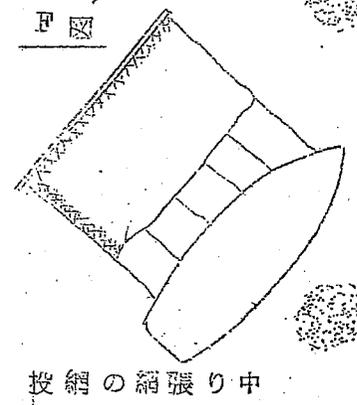
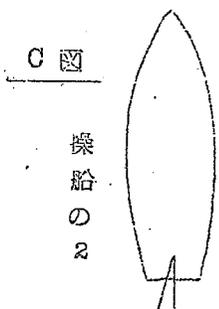
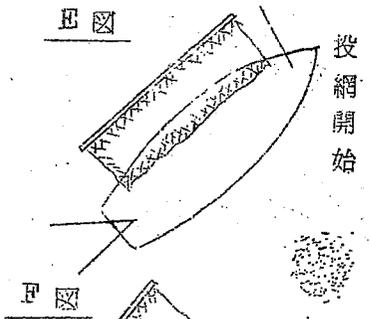
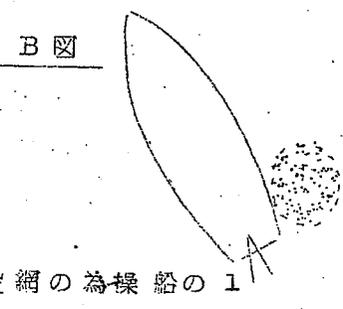
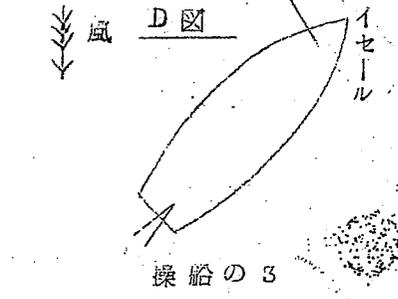
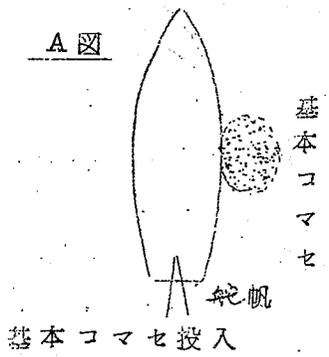
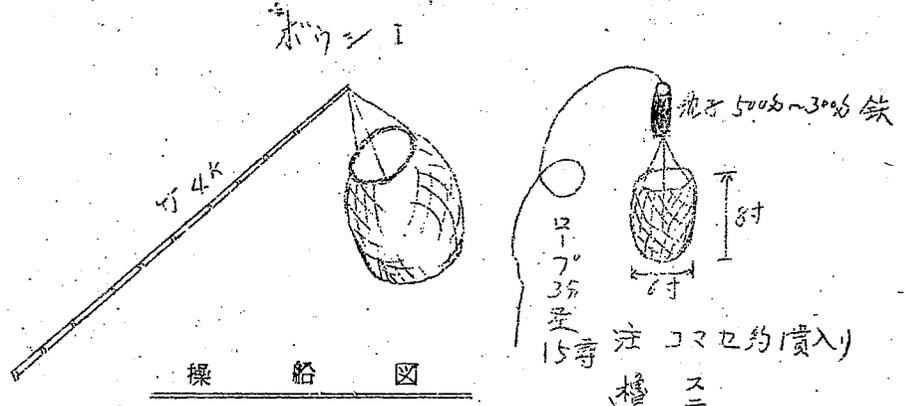
Ⅲ図の如く向竹は船体と平行であつても網成りは潮流により船首部或は船尾部に片寄つている場合が常である。いずれの場合でも左舷より投入するコマセが網中央部に来るよう其の投入は船首部、船尾部、中央部と其の時の状態により違ふのである。

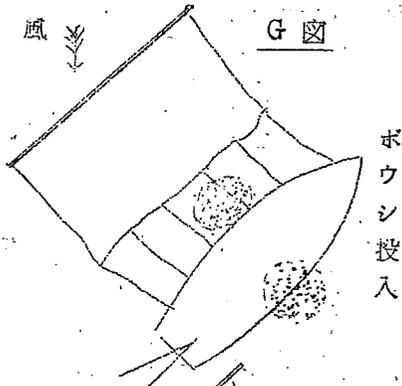
風のない場合は風の代りに櫓を船首より2丁、船尾より2丁で基本コマセが船体中央部に流れ付くように操船する。いずれにしても前述の基本形の操船状態となるよう風力、風向潮流、速向を考慮操船する。

## 3) コマセ

コマセは一般に片口イワシ類が多く使用され、これを肉挽機を通したそのままをボウシに使用し散コマセは若干海水で溶かすも一般さばはね釣で使用する程には溶かさない。一網の使用量は漁の良い時程多く使用し一回で大体4斗ダル1本～好漁の場合で4本内外を使用し一日

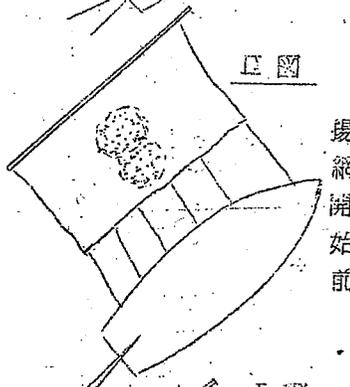
40回〜50回繰返で800メ前後を使用する。





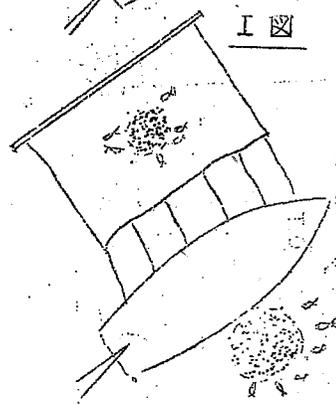
G 図

ボウシ投入



H 図

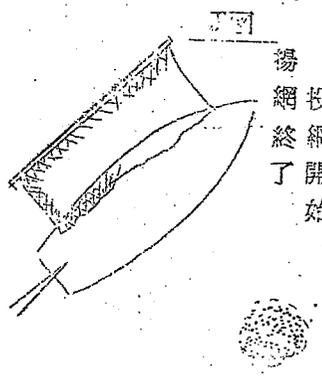
揚網開始前



I 図

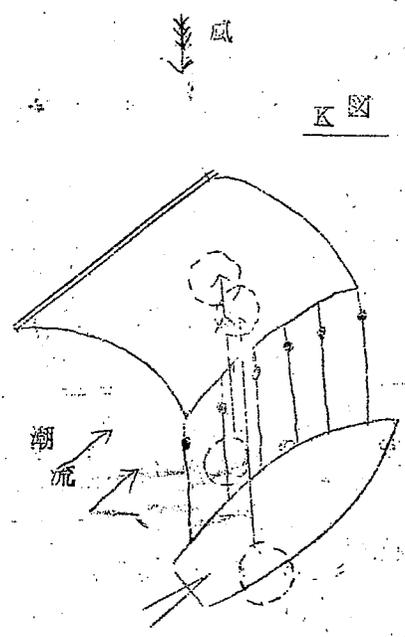
揚網開始

基本コマセ投入



J 図

揚網終了  
投網開始



K 図

網成り不良の場合のボウシ投入位置の1例

網地材料表

材 料			綿 糸							
名 称	符 号	材 料	太 さ	白 合	掛 目	長 さ	反 数	総 長	編 方	
点	捕	イ	8号	8号	14節	100	8K	16反	128	
"	"	ロ	5	5	10	"	8	4	32	
中	網	ハ	4	4	10	"	10	18	180	
脇	網	ニ	4	4	10	"	16尺	2	331	
"	"	ホ	"	"	"	"	152	"	304	
中	網	ヘ	"	"	8	"	10	13	130	
"	"	ト	"	"	"	"	"	"	130	
"	"	チ	"	"	"	"	5	"	65	
腕	網	リ	"	"	"	"	2325	2	47	
"	"	ヌ	"	"	"	"	2115	"	423	
"	"	ル	6	6	8	50	3325	2	67	蛙又
"	"	ヲ	"	"	"	"	3015	2	603	"
"	"	ワ	12	12	6	"	30	2	60	"
前	網	カ	12	12	6	100	3	8	24	本
力	網	ヨ	25	25	8分目	5	30	1	30	"
前	三角網	タ	60	60	3寸目	20~1		8		"
脇	三角網	レ	30	30	1寸目	10~1		8		"

46 1009/1

網 類 材 料 表

(雜具を除く)

名 称	材 料	太 さ	(所要量) 長 さ	本 数	総 長
前 網	ワイヤーロープ	4分径	30	6	180K
脇引揚ワイヤー	"	"	60	2	120
向竹引寄せワイヤー	"	"	45	2	90
環出しロープ	マニラロープ	5分径	15	2	30
縁 網	綿糸ロープ	4分径	25	9	225
各部結 網	"	"			50
向竹通しその他	マニラロープ	"			200
目通糸隠糸類	綿 糸	各 種			10玉
揚貨用その他	ワイヤーロープ	4分径			200K
沈 子	鉛	50匁		120ヶ	9メ
前 石	"	12メ		6	72メ
向 竹	真 竹	6寸径		6	
張 出 し 竹	"	4寸径		2	



△もはやミイニシ（季節風）の吹く時期となつた。蒼穹に  
 飛れる白雲、さんご礁に碎ける白波、風にゆれるバナナ  
 畑の白い葉裏など……季節の到来を告げている。こ  
 れから3月迄の暑は穏さなく、寒さなほ本土では味わえ  
 ぬ心地よい気候となり、例のハブツクワも冬ごもりに入  
 る。

△やがて製糖が始まり島では忙しい収穫の時期となるが、  
 台風の来なかつた今年の島民の表情は何となく明るいわ  
 うだ。カツオ釣魚業も終漁期を迎えたが例年より好漁し  
 たと各業者のイキも荒い。

△大島郡では年に一回青年団主催による「若人の祭典」と  
 称する行事がある。今年は瀬戸内町が当番で10月20  
 26日に港祭りとして併せて盛大に行われた。なかでも25  
 ~26日の各市町村対抗の相撲大会は人気を呼び、全島  
 から集まる観衆で古仁屋の街はごつたがえした。

10数軒の旅館は満員札止めで客に分宿する有様で  
 あつた。瀬戸内町選出力士が約一ヶ月前から合宿稽古に  
 励んだ甲斐あつて、団体、個人戦ともに優勝した。

△今更言うまでもなく奄美の相撲熱は盛んである。本部出  
 身の朝汐闘は今や日本中の人気を集めているが、奄美の  
 ファン（といつても老若男女全部民であるが）にとつて  
 は信仰以上のものがある。或るファンは朝汐の取り廻み  
 となると聞くのがこわいと云つてラジオから遠ざかつて  
 目を閉じている様子は全くいじらしい。

朝汐の勝つた日は焼酎の売れ行きがぐつと上るそうだ。  
 勝つても負けても「召シヨレ、召シヨレ」（飲めや飲  
 めやの意）である。

△さて昭和6年建てられて以来29年間、水産加工場とし  
 て広く利用されてきた当分場の加工場。削室は鉄筋プロ  
 ツジ建とするため12月13日に撤去された。この加工

場によつて大島産かつお節の名声を全国に博し、数多くの加工技術者を郡内に集めてきたのであるが、取りこわされていく姿を見ていると惜別の感一しおであつた。

今、構内には建築資材が山積し、雑音高く新加工場及び漁具倉庫（延307m<sup>2</sup>?93坪）の建築に取り掛つているが、完成は来春3月と云う。

△この春竣工した実験室、養魚池に加えて水試として充実した施設が完備されることになり、我々職員の自覚も更に高まるのである。

△いよいよ師走も間近か。諸兄の御健斗を祈つて止みません。

(11-19 G・S記)

※ ※ ※

#### 薩南海域かじき、まぐろ延縄漁況

10月分 才23報

10月中鹿児島入港船は25隻で、前月11隻又前年10月の13隻に比べ可成り多くなり活況をなしている。

漁場は前月に引続き、草垣西方沖のくろかじき漁場にも多少出漁しているが、東支那海のさば漁況の好転にともない（農林503漁区）しろかじきを主目的に前年と変りなく南下して（28°~30°N、124°~125°E）上物を2~3%前後の釣獲率で一日しろかじきを10尾前後、中には30尾も釣獲されており、一航海には普通上物を30~50尾、サメ類を50~70尾の漁獲で好漁を続けている。

体長はしろかじきで大部分が140~190mmで体重は30~40gと60~70gにそれぞれモードが見られる。

なお、沖縄東方沖にはきはだを目的とした出漁船がみられ可成り好漁をなしている。

(文責 漁業部徳留)

自昭和33年10月1日

至昭和33年10月31日

才一段 操業回数  
 才二段 かじき、まぐろ漁獲尾数  
 才三段 かじき、まぐろ的獲率  
 ( )内はサメ類を含む  
 才四段 漁場番号

33														33
32														32
31	21	31	41	51	61	71	81	1	32	13				31
30	20	30	40	50	60	70	80	2	55	42				30
29	229	329	339	349	359	369	379	389	399	409	419	429	439	29
28	328	338	348	358	368	378	388	398	408	418	428	438		28
27	327	337	347	357	367	377	387	397	407	417	427	437		27
	326	336	346	356	366	376	386	396	406	416	426	436		
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34

〔呆流魚〕

“魚は魚を呼ぶ”

水産課 上村 高

さばハネ釣漁船は昭和25、26年頃近海漁業のスターとして対馬附近や薩南漁場にデビューしたが、この時期を才一期の頂点として各漁船も漸次この漁場から姿を消していった。然し又一昨年あたりからこのハネ釣漁業の黄金時代が再来したかのような観がある。今回の好景気は東支那海におけるサバ資源の発見がもたらした結果であると思うが、才一期の場合と違つてサバ専業船の規模が大型化している点や、かつお、まぐろ漁船が兼業としてこれに従事していることである。

このような事態はサバ跳釣漁業による収益率が高いからであつて、船は船を呼び、魚は魚を呼ぶのである。即ち経済の成長度が高ければ高いほど漁船や貯蔵施設に対する設備投資が強化拡充され、それぞれの相関連性はなく過剰投資の弊に陥るのは世の常である。私共はいずれの事業に拘らずそれが最高景気の時、新にこの事業を深追いすることは既に後年である事例を数多く見てきたことを考える時、現在が最も警戒すべき時期ではなからうか。

サバ魚はサバ魚を呼んだ結果は生産過剰になることは必然であり、その連鎖反応は流通問題を提起する。具体的に云えば魚価安のコスト高の問題であるがこの魚価維持の対策としては政治的方策も必要であるが基本的には自主的に新しい商品需要をつくり出し供給のバランスを図ることである。このためには消費市場の調査、商品計画、販売網の設計、販売促進を一まとめにしたマーケティングが必要である。それには現在のような鮮魚や才一次加工程度の商品でなく、新技術に基いた新しい嗜好品として近代人の感覚と実生活にマッチしたより高度の商品を創造すべきだと考える。とは云うものゝその高度の技術、投下資本力、経

管能力がまた問題になる。これが方法について結論的に云えば。系統機関を強化しこれを中心として協力体制を確立して擧にあたるか。または大資本漁業の系列に属してその道を切開くか。二つの内一つしかないのではなからうか。船は船を呼び、魚は魚を呼ぶこの競合は発展の脈動として我々に順風を送ってくれるが反面、この風が奈落の底に追い落とす魔力を秘めていることも忘れてはならない大切なことだと考える。

## 東海サバ漁況

漁業部

本年度東海サバは農林漁区502・503区の海域で操業が開始されている。

漁況は前半時化続きのため低調であつたが後半活発に行われ1晩300～1500メの漁をなしている。漁場水温は26.1～27.0を示し昨年同期に比し1℃～2℃の高目を示している。

魚群は盛漁期に比較すれば小さく餌付もややむらがある。今後漁場は海況の変化と共に次第に南西に移動すると共に漁況も活発になることと想う。

10月中旬の漁場は前旬と大差なく302・503区で操業されたが。後半少し南西に移動し513区にてやや好漁を取っている。漁況は前半(10～14日)はかなり活

発となつている。水温は24.5～25.2℃を示して昨年より1～2°高目である。

魚群はマワリサバが多く餌付もやゝ難があり、漁場は当分513・514・及び525を中心とした中間暖水の潮境方面に漁場は形成されると思われる。現在の漁場は中間暖水域に形成されている。

10月下旬は503漁区が次々に南西に移動し513・514・525区が漁場となつた。今旬は昨年と比較して低調であり1晩200メ～500メの漁をなしている。漁場水温は24℃代を示し例年より1～2℃高目を示している。今後海況がこの状態が続けばこゝ当分中間暖水域の525区を中心とした漁場が続くと思われる。

#### 鹿兒島港入港船水揚調査

10月上旬

農林漁区	漁獲量	操業船数	一袋平均漁獲量	延操業人員	一人当漁獲量
493	4490 Kg	2	2245Kg	93	48Kg
502	42346 (6750)	14 (3)	3024 (2250)	647 (165)	65 (40)
503	219325	70	3133	3237	67
514	(3750)	(2)	(1875)	(110)	(34)
計	266161	86	3094	3977	66

( )内は昨年同期

10月中旬

( )は昨年同期)

農林 漁区	漁獲量	漁業 船数	一隻平均 漁獲量	延操業 人員	一人当 漁獲量
481	0	1	0	30	0
482	0	2	0	79	0
492	13165 (51125)	6 (11)	2194 (2827)	238 (485)	490 (641)
493	22500 (15562)	8 (6)	2812 (2593)	356 (249)	63 (626)
502	22878 (21187)	10 (3)	2287 (7061)	469 (137)	48 (1545)
503	109888 (70500)	79 (19)	1390 (3708)	3247 (837)	33 (840)
513	47250 (6750)	17 (2)	2779 (3375)	671 (85)	70 (725)
514	750 (6750)	2 (3)	375 (2250)	83 (144)	9 (468)
505	(22125)	(5)	(4425)	(224)	(986)
512	(375)	(1)	(375)	(46)	(78)
515	(15000)	(4)	(3750)	(184)	(813)
524	(24375)	(9)	(2707)	(379)	(641)
525	(27000)	(10)	(2700)	(461)	(585)
545	(2625)	(1)	(2625)	(53)	(425)
計	226856 (243375)	127 (74)	1786 (3287)	5288 (3287)	42 (735)

10月下旬

( ( )内は昨年同期)

農林漁区	漁獲量 Kg	操業船数	一隻平均漁獲量 Kg	延操業人員	一人当漁獲量 Kg
493	( 10873)	( 2)	(5437)	( 75)	(145)
502	( 9750)	( 4)	(2437)	( 176)	( 55)
505	198560 (466687)	76 (96)	2612 (4861)	3020 (3981)	65 (117)
504	4982 ( 18750)	5 ( 5)	996 (3750)	210 ( 211)	23 ( 88)
505	( 4125)	( 1)	(4125)	( 43)	( 95)
513	110232 ( 3750)	44 ( 1)	2505 (3750)	1755 ( 35)	62 (107)
514	20259	6	3376	287	70
515	6300 ( 1875)	2 ( 1)	3150 (1875)	100 ( 46)	63 ( 40)
523	5250	1	5250	33	159
524	7875	3	2625	102	77
525	24514	9	2723	401	61
536	2631	2	1315	126	20
545	( 1125)	( 1)	(1125)	( 53)	( 21)
計	380603 (516937)	148 (111)	2571 (4657)	6034 (4620)	63 (111)

漁 況 調 査 表

66

調査期間 自昭和33年10月 1日  
至昭和33年10月31日

調査船数 25 隻

鹿兒島港調査

調査船番号 1650号 ~ 1654号

漁場番号	漁場	操業船数	使用釣数	操業回数	ビンナガ	キハダ	マダロ	メバチ	メカジキ	マカジキ	シロカジキ	クロカジキ	パシモウ	小計	サメ類	その他	計
60		1	560	1							4 0.88		1 0.22	5 1.10	1 0.02		6 1.32
70		3	6240	13		3 0.05				3 0.05	3 0.05	39 0.63	4 0.06	52 0.83	61 0.98	1 0.02	114 1.83
71		2	1600	3						1 0.01	8 0.11	5 0.07	4 0.05	18 0.25	7 0.10		25 0.35
80		3	7100	12							12 0.17	69 0.97		81 1.13	37 0.52	10 0.14	128 1.79
81		4	3100	7		1 0.03					1 0.03	22 0.70	2 0.06	26 0.33	10 0.32		36 1.15
90		1	400	1								2 0.50		2 0.50	7 1.75		9 2.25
100		4	10020	32		37 0.37		9 0.08	2 0.02	2 0.02	1 0.01	2 0.02	2 0.02	55 0.54	136 1.22	3 0.03	194 1.94
110		1	9360	13		10 0.10		31 0.31		1 0.01				42 0.42	5 0.05		47 0.47
337		1	390	1						3 0.07				3 0.77	11 2.82		14 3.58
348		4	5700	12						50 0.85	55 0.94		5 0.09	110 1.87	56 0.95	5 0.09	171 2.91
349		3	2280	5						3 0.13	36 1.57		3 0.13	42 1.84	11 0.48		53 2.33
358		1	420	1						6 1.39	8 1.91		1 0.23	15 3.57	5 1.18		20 4.77
359		6	8585	21						14 0.16	78 0.91	10 0.12	8 0.09	110 1.28	31 0.36		141 1.64
366		1	4320	6		5 0.12		8 0.18	9 0.21				1 0.02	23 0.53	11 0.25		34 0.78
369		1	200	1							5 0.25			5 0.25	2 0.10		7 0.35
373		1	600	1								2 0.13		2 0.33	2 0.33	1 0.17	5 0.83
379		3	5520	11						1 0.02	9 0.16	24 0.43	1 0.01	35 0.63	177 3.08		212 3.84
396		1	450	3		11 2.44		3 0.67						14 3.11	14 3.11	1 0.22	29 6.44
399		1	2160	6		7 0.32							4 0.18	11 0.51	45 2.08		56 2.59
407		1	240	1		1 0.42			1 0.42					2 0.83	4 1.66		6 2.49
408		1	1180	2				2 0.17	1 0.08					3 0.25	8 0.67		11 0.92
409		3	4050	13		9 0.22					1 0.02		4 0.10	14 0.34	99 2.38		113 2.71
437		1	450	3		9 2.00				1 0.22				10 2.22	18 3.99		28 6.22
合計			74925			93		53	13	85	221	175	40	680	750		211459
漁獲率						0.12		0.07	0.02	0.11	0.29	0.23	0.05	0.91	1.01	0.03	1.95

分 場 日 記

- 10月11日 本館1番かび付開始  
マベ人工採苗研究(11月10日まで)
- 13日 宿務小学校6年生200名場内見学
- 15日~16日 赤7次サンゴ漁業調査
- 20日 養魚池調査(瀬戸内町手安)
- 21日 亀節出荷(焼津かつお節水産加工組合及び  
す講議即売品)。かもめ丸鹿兒島へ廻航
- 28日 鹿大水産学部和田助教授マベ研究を終えて  
帰鹿
- 30日 西田本場長外2名来場
- 11月4日~13日 マベ研究発表及び業務連絡(鹿兒島  
新村技師)(8日、日本水産学会九州支部  
大会に於て研究発表)
- 6日 かもめ丸才一次瀬魚一本釣漁業試験へ出港  
(鹿兒島港)
- 7日~13日 加工場撤去作業  
(瀬戸内町嘉鉄青年団整礼)

各 部 日 記

養 殖 部

- 11月14日 くるちよう貝々掃除
- 11月16日~17日 南海区ブロック会議  
於高知市(北山出席)
- 11月25日~27日  
西海区沿岸資源、海況、漁況予報会議及び  
西日本沿岸技術連絡会議 於長崎市(小松)  
浅海増殖効果調査、種子島(調査員、山口)
- 12月 1日 赤クサレ穴発生。暖気の水溫降下せず  
現在18~19℃

12月 3日 つきひ貝成熟調査 才一回目

12月 9日 のり乾燥

12月15日 くるまよう貝取揚げ

製造部

11月15日

雨水研ブロック会議出席のため製造部長高知へ（1週間）  
本県より乾燥機、フィツシユソルブルの件につき問題  
点を提示す。

11月19日～12月12日

ソーセージ製造試験。

原料魚の大小により生ずる足の強弱について試験を実  
する。

11月19日

大島分場機械設備、予算関係打合せのため、分場長及  
び石神技師来訪。

11月25日

本年度後半期事業の推進大綱を協議す

問題点

1 特殊塩の油焼防止試験

2 小アジ、小エビの加工商品化

3 煉製品の足について

4 乾燥機の応用

5 圧搾節の加工基本施設について

11月27日 瀬戸内町永井氏かつね節加工技術員の事につ  
いて来訪

12月1日 指宿市石嶺技師わかさぎ加工打合のため来場

12月6日～9日

特殊塩効果試験

12月9日

のり機械乾燥試験

漁業部

11月1日 照南丸才3次南方マクロ漁業試験出港  
船員事故のため11月24日帰港

11月8日 ちどり丸才5次瀬魚立縄釣漁業試験出港  
11月19日帰港

11月10日～13日

水産業技術改良普及西海区ブロック会議及  
び漁況研究協議会開催

調査部

11月14日～11月29日 蕃養場調査資料作成

12月1日～12月6日 フラントン査定

12月2日～12月5日 東串良町魚漁調査

12月3日 つきひ貝熱度調査

12月9日～12月13日

牛根蕃養場調査（鹿大水産学部との共同調査）

## 編 集 後 記

※ 体験と着想を密着させたつもりで、なめらいなくすばり  
りと水産への挑戦。伏兵あり妙手考案中資金と根気つ  
づかず互解のやむなきに至る。

魚村を歴訪してこの種の例少なからず放置するには  
あまりにも惜しい。

※ 「魚は魚を呼ぶ」の呆流魚、山中深き塾師への頂門の  
一針、水産課上村氏の弁。

※ 樹下石上うしおる年。場買相寄り原始的装置を快適に  
操作して、編集、印刷、配布一連作業を果す。集積ま  
れば35号となるもうしお未だ潮気乏しく、赤銅色  
には程遠し。今後海上鍛錬と栄養を必要とす。編者一  
同年末の感である。

編 集 部